

「地理総合」に向けての授業例～「半日観光ガイド」プラン

藤女子高等学校 非常勤講師 大久保 雅弘

1 はじめに

昨年と同じく「日本の観光産業」のところで「半日観光ガイドプラン」を実施した。テーマは、フード系ではなく、社会的なテーマに限定した。

夏休み前に「札幌の文化財」の地図(制作:札幌市市民文化局文化部文化財課)を配布し、夏休み中にグーグル・クラスルーム経由で提出した。

2 生徒配布資料

⇒夏休みの宿題。

一昨年・昨年と同じく「半日観光ガイドプラン」を実施します。

中間テスト(100点)、期末テスト(80点)と夏休みの宿題(20点)との合計点で前期の評価を出します。特にペーパーテストが苦手な人は頑張りましょう。

北海道では「観光」は重要な産業です。特に札幌市は道内小中学校、道外高校生の修学旅行先として人気があります。

修学旅行生に札幌を紹介するコースを考えてみましょう。昨年まではテーマは自由でしたが、今年は歴史的建造物、博物館、美術館、コンサートホールなど文化的内容にします。食べ歩きや飲食店の紹介は駄目です。

寄宿生は、帰省先の紹介でも勿論OKです。

⇒今年から地理が必修化

日本の高校生は、全員「地理総合」を学ぶようになりました。現在の地理よりも「観光」の内容が充実しています。「半日観光ガイドプラン」は、他の高校の地理授業の参考例になります。

⇒作業の手順

「札幌市の文化財」の地図、時計台や永山邸のパンフレットを参考にテーマを決めます。その後、スマホやPCでウェブサイトを検索し、内容をまとめます。

オンライン授業のクラスルーム経由で感想文・レポート用紙を利用して提出します。自宅のPCで作成し、プリントで提出するのもOKです。

⇒提出は始業式8月18日(木)3時間目の授業です。

3 2022 半日観光ガイドプラン一覧表

生徒名	プラン名	生徒名	プラン名
K	札幌の美術館巡り	S	北海道最古の商店街(狸小路商店街)
K	札幌でアイヌの歴史を遡ろう	M	北海道大学総合博物館
T	札幌市電で巡る重要文化財	M	中島公園にある観光スポット
M	神社巡り	I	開拓使のシンボルマークを探す旅
K	大通りから巡る札幌の文化財	(高2地理選択者9名)	

～大通から巡る札幌の文化財～

その1 札幌市時計台



場所 札幌市中央区北一条西二丁目
 営業時間 8:45～17:10 (入館は17:00迄)
 観覧料 大人 800円 (高校生以下無料)
 アクセス 地下鉄南北線、東西線、東豊線大通駅下車市役所側出口徒歩5分
 (JR札幌駅より地下歩行空間を大通方面へ約10分 9番出口)



北海道大学の初代教頭であるクラーク博士の構想に基づき、明治11年に建設された、現在は札幌市を代表するスポット。電気や電池を使わずに時を刻み、鐘を鳴らしていて、国内で1番古い機械式の塔時計となっています。1階は大展示室となっており、時計台の歴史や歩みを知ることができ、2階のホールでは、資料映像の放映が行われています。



↳クラーク博士像と記念写真が撮れる！

日没後～21:30までの間
 LEDでライトアップされた
 時計台を見ることができる



開拓時代は懐中時計や腕時計などはとても高価な物だったためこの時計塔が市民に時間を知らせる役目を担っていました。

その2 北海道庁旧本庁舎



場所 札幌市中央区北三条西六丁目
 営業時間 8:45～18:00
 観覧料 無料
 アクセス 地下鉄南北線、東西線、東豊線大通駅出口から徒歩9分
 (JR札幌駅から徒歩5分)



「赤レンガ庁舎」の愛称で知られる、新庁舎ができるまでの約80年間、道政を担ってきた煉瓦づくりの建物。明治21年に建設されたアメリカ風ネオ・バロック様式の建築であり、約250万個ものレンガが使われています。館内には、明治の札幌の街のジオラマや開拓に関する絵画が飾られており、北海道の歴史を学ぶこともできます。

四季を感じる美しい風景を見ることが出来る

春には桜やライラック、夏には緑の木々やハマナス、秋には紅葉と四季の移ろいを感じられ、異なる表情を見せてくれます。



建物には開拓使のシンボルである「五稜星」があるのでチェック！

時計台にも同じマークがある



その3 北海道大学農学部植物園・博物館

場所 北海道札幌市中央区北3条西8丁目
 営業時間 ・4月29日～9月30日 9:00～16:00
 ・10月1日～11月3日 9:00～15:30
 休園日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）
 入園料 ・大人420円(30人以上団体350円)
 ・小中学生300円(30人以上団体240円)
 アクセス 地下鉄東西線、南北線、東豊線
 大通駅出口から徒歩10分
 (JR札幌駅出口から徒歩10分)



現役の博物館建築としては国内最古である博物館本館を始め、6棟が重要文化財に指定されていて、西洋の建築法を取り入れた明治・大正期の建物を見ることができます。他にも、イギリス人宣教師のジョン・パチェラー博士の旧宅であるパチェラー記念館や宮部金吾記念館があります。アイヌを中心に北方諸民族の資料も展示されており、重要有形民俗文化財に指定されたアイヌのまるきぶねなど様々な物を見られます。



実際に使われていたものや教育・研究用に作られたもの

設備品も展示ケースなど当初のものが保存され利用されている



引用サイト

札幌市時計台・https://www.sapporo.travel/spot/facility/clock_tower/

北海道庁旧本庁舎・https://www.sapporo.travel/spot/facility/former_hokkaido_government_office/

北海道大学農学部植物園 博物館・<https://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>・<https://ja.wikipedia.org/?curid=1085457>

「開拓使のシンボルマークを探す旅」



① 清華亭

② 旧北海道庁本庁舎

③ 時計台

④ 豊平館

～コース～

① 清華亭
↓
② 旧北海道庁本庁舎
↓
③ 時計台 (旧札幌農学校演武場)
↓
④ 豊平館

星形のマークはなんだろう



明治初期に建築されたいくつかの歴史的建造物には決まって、あるマークが刻まれています。それが「★」のマークです。これは、開拓使がシンボルマークとした赤い星、「五稜星」がルーツです。シンプルながら印象的なそのデザインは、今でも北海道のあちこちに残されており、さらには北海道の道旗・道章のデザインのもとになりました。

① 清華亭



住所：札幌市北区北7条西7丁目



観覧時間：9:00-16:00

清華亭は、札幌最初の都市公園である「偕楽園（かいらくえん）」の中に、来賓接待の施設として建築されました。アメリカ式と和式が調和した建物で、館内は明治時代を旅しているような気分を味わえます。

②旧北海道庁本庁舎



住所：札幌市中央区北3条西6丁目

営業時間：8時45分～18時

北海道庁旧本庁舎は北海道民から「赤れんが庁舎」の愛称で親しまれているレンガ造りの建物です。昭和21年にアメリカ風ネオ・バロック様式で建てられており、館内の執務室から明治時代に作られたひずみのある窓ガラスを通して外を眺めると、まるで当時にタイムスリップしたような感覚になります。他にも明治の札幌の街を再現したジオラマや北海道の開拓に関する絵画が飾られ、北海道の歴史を学ぶこともできます。

都心部にありながら、美しい庭園で四季を感じられるのが魅力！！



③時計台



住所：北海道札幌市中央区北1条西2丁目

開館時間：8時45分～17時10分（入館は17時まで）

観覧料：大人200円（高校生以下無料）

正式名称は、「旧札幌農学校演武場」です。現在の北海道大学である札幌農学校の演武場として、初代教頭クラーク博士が構想しました。時計台の時計機械は、鳩時計と同様の振り子時計です。動力にはおもりを使い、原形のまま正確に動き続けている日本で最も古い塔時計です。中に入ると間近で見ることができるので是非行ってみてくださいね！



④豊平館



住所：札幌市中央区中島公園 1-20

営業時間：9時～17時（入場は16時30分まで）

豊平館は明治政府が建てた唯一のホテルで、明治天皇が札幌・北海道の視察に訪れた1881年に開館しました。日本の伝統的技術を駆使して建造された明治初期の代表的な木造洋風建築で、国指定重要文化財です。豊平館には明治、大正期に三度にわたり明治天皇や皇太子が宿泊し、そのときに使用した品々などが展示されています

綺麗な白とウルトラマリン・ブルーのコントラストがとても美しく、インスタ映え間違いなし！！



4 まとめ

「観光ガイドプラン」は、観光地図の読み取り、観光地のネット検索、交通機関時刻表の利用、プレゼンテーションなど、教員と生徒が気軽に実施できる地域学習といえる。今年は地理選択者の減少とテーマを文化財に限定したため、似たようなプランが多かった。一昨年や昨年のような自由なテーマが良いと思う。

(引用・参考ウェブサイト)札幌地理サークル <http://chiricircle.michikusa.jp>

新 札 幌 地 名 考 (2)

山内 正明

狸小路 怪しげな「夜の街」から有名商店街への大変身

「狸小路」は南2条と3条の中通りにある北海道最古の商店街の一つです。狸小路商店街振興組合はアーケードのある西1丁目から7丁目までで加盟店は約200店舗ありますが、広義には西10丁目までをいいます。

札幌本府草創期に創成川河畔に現れた宿屋とか風呂屋とは言ってもいずれも飯盛女と呼ぶ遊女をおく店が現れたのが始まりでした。明治6、7年のころ南3条西2丁目に旅籠屋や渡世侠客松本代吉が芝居小屋「東座」を建て、これがきっかけとなってあたりに一杯飲み屋の店が出始めました。

「狸小路」の呼称が使われ始めたのは明治5年の「御用火事」以後のことで、西1丁目から3丁目付近には居酒屋のほか「白首屋」と呼ばれる「曖昧屋」（料理店や旅館などに見せかけ売春を行う店）が集まりはじめました。明治20年代になると私娼や売春婦が多く現れたので西1丁目は「白首小路」、その南北の中通りには「狐小路」、1丁目通りの西側半分には「弁天小路」などの俗名もつけられました。「狸」も「白首」や「狐」と同様、そうした人々を指す言葉で「弁天」も女神であり転じて美人を意味しています。

「札幌繁盛記」（明治24年）には「両側に軒を並べ四十余の角行灯影暗き辺、一種異体の怪物、無尻を着る下婢体のもの、唐棧の娘、黒チリーツ紋の令嬢的のもの無慮百三四十匹、白い手をスクッと伸ばして大の男子等を巧みに生捕り、財布の底を叩かせるハテ怪有な動物かな（中後略）」などとあります。

明治18年に西2丁目に「東罐工場」（百貨店の前身）、西3丁目に「第一罐工場」が開店し、同書には「和洋小間物、陶器、書籍、煙草、翫弄品などが売られ、其処彼處の四辻には屋台店あり」（中後略・加筆）とあり、屋台仕様の魚屋、八百屋、肉屋や一般商品を扱う店も出始め狸小路発祥の地となりました。

明治25年に狸小路で110戸が焼失する大火があり、一時白首屋は姿を消しましたがその後も明治35年ころまでは屋台店などと結託した白首が出没していたといえます。

明治20年代以降、市街地が南へ拡大すると狸小路は風紀上の問題から警察の取り締まりが強化されました。白首屋の類は薄野への移転が求められ、多くの店が薄野に移転し三等貸座敷（遊女屋）となりました。その後、狸小路には一般商店も集積しはじめ本格的な商店街が形成されていくこととなります。

大正14年には狸小路連合会が結成され、昭和2年に西5丁目がアスファルト舗装され鈴蘭灯が設置されました。これをきっかけに数年のうちに西1丁目～6丁目までの道路舗装と西2丁目～6丁目までの鈴蘭灯が完成し、新興商店街としての注目度が上がりはじめ、出店数も増加していきました。「狸小路」の負のイメージを払拭するために「鈴蘭街・鈴蘭通」へ改称してはどうかなどと話題にもなりました。丸井今井、三越などのデパートとの激しい商戦が続きながらも昭和13年には狸小

路商店街商業組合が結成され、鈴蘭型ネオンの取付けや舗装の改良、歳末大売出しなどのイベントを企画するなどの工夫も行われました。そのころから「狸小路」は全道から買い物客が集まる道内屈指の商店街へと発展していきました。

戦後は一時期闇市も出現しましたが、すぐに活況を取り戻し昭和 33 年から 35 年にかけてアーケードが完成しました。しかし、昭和 46 年に地下鉄南北線の開通し、同時に地下街の「ポールタウン」（駅前通）と「オーロラタウン」（大通）が誕生したことで中心街の人の流れが大きく変化しました。さらに平成期に入ると札幌駅周辺の再開発で他地区との競合が激化して狸小路の客足は減少し閉店する店舗も出始めました。店舗の改装や専門店化に活路を見出そうとしたり、店舗の集合化やアーケード改良などで、特に若年層の顧客獲得など集客力の強化に工夫を重ねています。近年はアジアからのインバウンド需要が増加し、ドラッグストアや飲食店、ホテルなどの進出が多くなり「狸小路」の様相も大きく変化しています。

リトル トウキョウ 「道都 札幌」を皮肉った呼び名

「リトル トウキョウ」は 1960 年代の高度経済成長期のころに札幌の都市的性格を揶揄して使われるようになり、マスコミでは「東京都札幌区」などとも表現されました。

「蝦夷富士」「利尻富士」など「富士」と名付けられた山は全国にたくさんありますし、「松前町」「足利市」「津和野町」などのように「小京都」と言われる街は全国にあり、昭和 60 年には全国 53 町村の「小京都」が「全国京都会議」を結成しています。どちらも山の姿や街並みやそのたまたまから付けられた誉め言葉のような意味合いをもちプライドもあります。

しかし、札幌を「リトル トウキョウ」と呼ぶのは決して誉め言葉ではなく、札幌のたどってきた歴史的的特色や都市的性格を揶揄した表現と言わざるを得ません。

本来「リトル トウキョウ」はロサンゼルスのだウタウンにあるアメリカ最大の「日本人街」に付けられた通称で、それから転じて国外にある日本人街に使われることもあります。

明治 2 年に北海道が開かれると同時に開拓使が札幌に置かれ、以来 150 年以上「道都札幌」としての歴史を積み重ねてきました。戦前まで北海道はあたかも「内国植民地」のように位置付けられていました。戦後も「北海道開発庁」が設置され、その出先機関として「北海道開発局」が札幌に置かれ一貫して国家主導の開発が進められてきました。

かつて明治・大正生まれの人はよく「内地の親戚に・・・」などと自ら北海道を「外地」と認めるような意識も高かったようです。

戦後は北海道の経済の自立的発展を目標としながらも現在に至るまで多くの難題を抱えています。戦前までは道内における札幌の経済的機能は函館や小樽に劣っていましたが、戦時統制経済により経済・金融機能が札幌へ集約されるようになりそのまま戦後に引き継がれました。

以後、札幌の政治的経済的中心性は一層強まり人口は札幌圏への一極集中が加速しました。札幌へ多額の経済投資が集中し、道外企業が次々と札幌に支店・出張所を設置して北海道全域を統括する「支店経済」が成立しました。政治的・経済的機能が札幌へ一極集中していく一方、道内他地域の過疎化が同時に進行していきました。

「しょっぱい川（津軽海峡）の向こうには「札幌」と「北海道」がある。」と言われ、札幌は常に

すべての面で北海道を管轄支配する側にあり、ある意味で北海道とは一体でなかったとも言えます。

札幌が東京の出先機関の拠点だったことから不名誉ながら「リトル トウキョウ」の呼び名が付いたと言うわけです。仙台や福岡のような地方中枢都市はどこも大なり小なり札幌と同様の変化を強いられ、都心のビル街はどこも個性を失い、平準化されてしまいました。「リトル トウキョウ」という表現は札幌に特化して使われる状況ではなくなりました。

また札幌支店に派遣される社員は、家族と離れて単身で赴任する人が多かったことから「札チョン族」なる言葉も生まれました。チョンは韓国語の「チョンガー（独身男子）」を略したもので、昭和40年代の高度経済成長期には自嘲的によく使われ、福岡にも「博チョン」という表現があったらしいのですが今は知る人も少なく死語となりました。

さむらい部落 貧民が集まり住む河原にできた都市の陰

「さむらい部落」は昭和中期まで「豊平橋」（南5条東4丁目）の上流から「東橋」（大通東14丁目）の下流にかけて豊平川の河原に貧民が集まり住んでいた地域の俗称でした。風雨をしのぐ古材やトタンなどを拾い集めた掘っ建て小屋が建ち、これが次第に増加して「さむらい部落」と呼ばれるようになりました。

そこには食べ物などを人にもらい歩いて生活する「ほいと」という乞食もいましたし、「おはらい屋」・「ばたや」・「ぶたや」「雑品屋」「ゴミ屋」などと呼ばれる、紙屑、ぼろ着、金物類などを拾い集めて換金する廃品回収業をしている人などが集まり住む地区となっていました。

昭和30年ころまでは街のあちこちに残飯から紙屑、ぼろ、何でも捨てられる大きい木製で上蓋のついたゴミ箱が設置されていました。そこで南京袋をかついで鈎かぎのついた二本の棒を腰にぶら下げて廃品を回収する「ばたや」がゴミをあさって歩く姿がみられました。その姿が「さむらい」に似ていたことから「さむらい部落」と言われるようになったようです。

「昭和恐慌」（昭和4～6年）のころには人心が荒れ放題で非行少年や犯罪者も多くなりました。昭和4年の新聞には「東橋のたもとに30人ほどが掘っ建て小屋を建てて住み始めた。明治中期から苗穂地区に細民街が形成され、そこからあふれ出た人々が東橋付近の河原へ定住したとか、「白石遊郭」の残飯を目的とした浮浪者が移り住んだ」などとあります。昭和12年の記事には、「鉄類高騰のインフレ景気で潤ったサムライ部落民が賭博で逮捕された」とあり、いずれにしても市当局や市民も遠巻きに見ているだけで何ら手を打てなかったそんな時代でした。

終戦直後にも引揚者や戦災者などが加わり河原の両側に「さむらい部落」が形成されました。進駐米軍の占領下で見苦しいから取り払うように指示があり、昭和21年に札幌市は53戸131人に移転命令を出しています。

しかし、その後も「さむらい部落」はなくなり昭和25年の新聞には「99世帯250人のために苗穂か川向こうの豊平に「特殊庶民住宅」を用意する計画があるが両地区の反対にあった」などとあります。また同じころ250軒ばかりの掘っ建て小屋があつて102世帯が生活保護を受け、120人が「ニコヨン家業」（昭和24年の緊急失業対策事業法で職業安定所から日雇い労働者へ支払う賃金が240円）で生活していたと回想した記載も残っています。

昭和31年に豊平橋上手から東橋下手まで49世帯385人が生活していて、同年の新聞には「苗穂、

白石、琴似に市営低家賃住宅が建築され、そこへ移住して12月に「さむらい部落」が消失した」との記事があります。

しかし、昭和40年代中頃までは150世帯ほどがあって単身者もいれば家族で生活している人もいたようです。廃品回収業のほか露天商や行商の人もいて、バラック周辺に廃品。古新聞、ビール瓶、材木などが山積みされていたなどと当時の様子を知っている人たちの回想も残っています。いずれにしても、戦前戦後を問わず「さむらい部落」は河原を不法に占拠していた住所不定者の居住区であり、古い河川図には「無頼居住」という記載もありました。時代状況により常に人の入れ替わりもあり、戸数や住民数について正確な記録はほとんどありません。

確実に「さむらい部落」としての形態が消失したのは昭和47年に冬季オリンピックの開催が決定し、「豊平川通」（オリンピック道路）の建設などで昭和44年に住居が取り壊され、住民は市内各地に建設された厚生住宅や改良住宅に転居したり保護施設へ収容されてのことです。

しかし、現在もホームレスはいて社会福祉任意団体の調査で近年平成19年の132人をピークに減少はしたものの令和2年1月の調査ではネットカフェや24時間営業の店に夜通し滞在する人などを除いても30人ほどいて、中央区の国道沿いの河川敷には少なくとも3人のホームレスがいると新聞に報道されています。

追分 開拓使官園（馬の放牧地）で馬を追い分けた場所

「追分」は手稲区西宮の沢から西区宮の沢あたりにあった通称地名で「手稲追分」とも呼ばれ現在も「手稲追分」のバス停が北5条手稲通（「札幌国道」）の手稲・西両区の境、宮の沢1条5丁目にあります。

和人たちが入植する以前から宮の沢付近にはアイヌの人たちが住んでいましたが、明治2年に開拓使が官園として馬の放牧地をつくり、ここが「馬を追い分けた」場所だったことが地名の由来となり、その時の木柵は明治末期まで残っていたとの記録があります。

古沢仁は「続謎解きさっぽろ」（北海道新聞・2022年）で旧中の川の形成した小規模な扇状地の西端にあり、これを追分川が侵食分離しそれを囲むように上富丘川と中の川が流れて微高地が残されこれが際立った地形となり「追分」の地名がついたと説明しています。

明治16年に山口県人の林梅五郎ら10戸が入植して開墾を始めましたが、周辺の土地一帯は鶴の産卵地であったというほど手付かずの低湿な原野と森林が広がっていたため、他地区に比べて開拓は遅れました。

「明治29年版地形図」には地名の記載はありません。「追分」の場所は上手稲村の「札幌越」（現国道5号・札幌国道）沿道に家並がまばらに連続し、そのすぐ東側に明治9年に創建された上手稲神社がありました。しかし札幌越の北側は広葉樹林や湿地・原野が広がっていました。

「大正5年版地形図」には現西宮の沢5条1丁目あたりの札幌国道沿道に「追分」の地名が記載され、周辺は一部に水田も開かれていましたが、大半は荒地・篠地のままでした。

「昭和25年版地形図」では国道5号沿道に「追分」を挟んで東側に「上手稲」西側に「富丘」、そして「追分」南側の山麓に「宮の沢」の地名が表記されています。「上手稲」「宮の沢」「富丘」は旧手稲町の字地名としてありましたが「追分」はなく通称地名として記載されていたことになりま

す。周辺には集落もほとんどなく、一部が水田や畑地になっていますが大半は荒地のままです。

「昭和 50 年版地形図」では「追分」の表記がなくなり、ほぼ同じ場所に「手稲宮の沢」と西側に「手稲富丘」の記載があります。国道 5 号の北側にあった水田はなくなり畑地と荒地が分布し、若干宅地化の兆候も出てきています。

「平成 4 年版地形図」では「西宮の沢 5 条」の表記となり、国道から北側へ宅地化が進み始めていますが JR 沿線にはまだ荒地が残り土地利用がないままです。現在はまだ空地率は高いもののほぼ全域が住宅地化されています。

「追分」あるいは「手稲追分」はしばらく西区宮の沢及び手稲区西宮の沢にまたがる地域の通称地名でしたが、平成元年手稲区が西区から分区したときに西区宮の沢町内会と追分町内会の一部が手稲区に編入され西宮の沢地区となり、今は手稲区の「追分町内会」にその名をとどめています。

その他、「追分」を起点に屯田 3 番通まで約 6.2km の「追分通」（道々 128 号）が平成 24 年に完成し、発寒と新発寒の境界を北東に石狩花川へ通ずる基幹道路となっています。

また「追分川」は宮の沢 3 条 2 丁目で一旦「中の川」から北へ分流し西宮の沢、新発寒を流れ新発寒 4 条 6 丁目で再び「中の川」に注ぐ延長約 2.8km の札幌市が管理する準用河川（二級水系）で他に「上追分川」もあります。

国道 5 号が「追分川」を渡る「追分橋」をはじめ「中央追分橋」「東・西追分橋」など「追分」のつく橋梁が周辺には 9 本もあります。

こうしんづか 庚申塚

苦勞を共にした開拓民の心の支え

「庚申塚」は道内に 91 基あって、札幌市内にも 5 基が確認されています。「庚申塚」の信仰は中国の道教が日本に伝わり、仏教、神道、修験道などの様々な民間信仰や習俗がミックスした複合信仰です。明治期には政府が迷信と位置づけ排斥する動きもありましたが民衆の間では根強く信仰されてきました。神社や寺院で神仏を礼拝することもありましたが、多くは「庚申塚」あるいは「庚申塔」という碑を建てて信仰の対象としました。北海道に入植した人々も苦難に満ちた日々の生活の心の支えとして「庚申塚」を建立し信仰していました。長寿延命、心願成就、無病息災等々の願いを叶え守護してくれる御利益がありますが、外から入る魔、災いを遮り防ぐ「道祖神」の信仰も重なり村境などによく建てられました。

また「庚申の日」（60 日周期なので年に 5、6 回）の夜には、信仰上の儀礼でもある「庚申待ち」と呼ぶ集まりがあり、近くの人たちが集まってよもやま話に花を咲かせ夜を徹して語り合いました。この集まりは当時の農村では数少ない楽しみの一つで地域の親睦を深める場でもありました。

1 つは東区北 26 条東 22 丁目の「ホームラン公園」内にあり、近くにはかつて「庚申塚」のバス停がありました。旧元村と丘珠村の村境近くにあつて、「苗穂丘珠通」（通称元村街道）と「札幌新道」（札幌自動車道）が交差する近くにあります。以前はもっと南側にありましたが道路拡幅や区画整理のために現在の場所に移動しました。

庚申の年（大正 9 年）に越後地方からこの信仰を伝えた丘珠村の地元民が「庚申塚」を建立し、その下に 2 升のお神酒を大徳利に入れて埋め、60 年後に再び巡ってくる庚申の年に掘り起こして、そのお神酒をいただくと家内安全、無病息災などの御利益があるとされました。しかし、道路工事のためやむを得ず開封しましたが、封の仕方が悪く汚水が混入し飲める状態ではありませんでした。

その大徳利は現在「札幌村郷土博物館」に保存されています。

もう1つは「北海道教育大学キャンパス」のすぐ西側「あいの里循環通」近くの北区拓北258番地にあります。自然石に彫り込まれた「仙人庚申塚」で、高さは1mほどで山岳信仰の開祖「役行者」を表しています。明治28年にここに入植した徳島県人によって建てられました。この年に鴻城小学校の前身となった寺子屋が建てられ、そこへ通う村の子供たちの安全を祈願して建てたと言われています。

3つ目は南区藤野5条6丁目の高見台会館に残っています。大正7年5月に東北の南部地方から入植した八重樫金助ほか13名が建立したもので、もとは国道沿いにありましたが昭和56年に現在地に移設して、昭和54年からは藤野庚申塚保存会により、秋の庚申の日にお祭りを行っています。

4つ目は白石区中央2条5丁目の太田修治氏私邸内に高さ1.2mの「庚申塚」があります。明治30年に山形県から入植した修治氏の祖父文治が10円60銭で建立したものです。

5つ目は明治23年に旧円山村の村境に、近くの住民20数名が街の発展を願い中央区南2条西24丁目に建てた庚申塚です。現在は南2条西26丁目の佐藤氏私邸敷地内に馬頭観音婢とともに移設されています。

かねちょう 曲長通・本間長助 造り酒屋の屋号からついた地名

「曲長通」は手稲区にある道路で、国道5号（稲穂3条7丁目）から北へ星置と曙の境界を手稲山口の「道央新道」（国道337号）まで通ずる約2.5kmの幹線道路で、「市販市街地図」にも「曲長通」の地名が記載されています。

「曲長」は本間長助が経営していた造り酒屋の屋号「ㄣに長」を「かねちょう」と読んだところから付いた道路名です。明治37年に本間長助は手稲前田のあたりに130町歩の「本間（曲長）農場」を開設し、「曲長通」は最初その農道としてつくられたものでした。「札幌支庁管内案内図」（大正4年）には「本間農場」の地名が記載されています。

本間長助は滋賀県大津の生まれで明治7年に札幌へ移住し、明治10年に南3条東2丁目に札幌で最も古い酒造業者の一つとして創業され地酒「初祿」の銘柄で知られていました。

「札幌市街之圖」（大正末期）の「酒造家案内」には市内の11軒の造り酒屋が記載され、その中にも「ㄣに長」本間長助があります。商家銅版画「札幌繁栄図録」高崎龍太郎（明治26年）にもその店舗が記載されていて、戦後しばらくまでは立派な石蔵が残っていました。

昭和26年に上映された黒澤明監督の映画「白痴」では、その石蔵が主要舞台として使われました。1950年代半ばに本間は酒造業から倉庫業へ転じて本間倉庫株式会社を経営していました。

「本間（曲長）農場」のあたりは大部分が泥炭地で排水性が悪く農耕には不適な土地だったので、牧草地を広げ酪農を中心とした農業が展開されていきます。周辺には明治28年に「前田農場」が開設されたのを筆頭に、「稲積農場」「興農園」「明治農場」と次々に大規模な農場が開設され、北海道酪農の中心地のひとつでした。

「手稲金山」で「手稲鉱山」を開いた三菱金属鉱業は鉱石を選鉱した後の大量の鉱滓を処理する廃棄場所を必要としていました。鉱山の直下にある「本間（曲長）農場」に目をつけた三菱金属鉱業は買収交渉の末、昭和12年に全農場の買収に成功し、鉱滓を沈殿させるダムを建設し「本間（曲長）農場」は解散しました。

それまで富山県から入植した6戸の小作農家が毎年のように襲う水害と闘いながらも辛抱強く努力を続けていました。酪農を中心に水稲や畑作も行う多角経営に可能性を見出そうとしていただけに涙ながらの無念の農場解散で、6戸の農家は手稲山口、稲穂、銭函などに離散していきました。現在この地域は「明日風」の新興住宅地域や「手稲工業団地」「手稲山口軽工業団地」が立地し、一部は「JR 運転所」や「運転免許試験場」となっていて昔の面影はありません。

稲積公園・稲積豊次郎 小樽商人が拓いた土地

「稲積」は行政地名にはありませんが手稲区前田の南西部、「三樽別川」「中の川」「軽川」に囲まれた地区の通称地名で、JR 函館本線の北側にあり、西区新発寒と隣接しています。

昭和60年代に稲積中学校、稲積小学校が相次いで開校し地域名称として定着しました。昭和57年に札幌リゾート開発公社が「ていねプール」を開設し、その後野球場、テニスコート、パークゴルフ場、ゲートボール場、スキー山広場などが整備され総合運動公園として「手稲稲積公園」となりました。

昭和61年にはJR「稲積公園駅」が臨時乗降場として開設されたことで知名度が上がり、他にも新発寒稲積橋、稲積中央通、稲積西通など「稲積」を付した地名が多くあります。

ただ「稲積川」は稲積地区から西北の「手稲稲穂」に水源をもち、「手稲稲穂」の中央を貫流し、曙4条3丁目で「土功排水」に合流する全長1.2kmの小河川で、本来であれば「稲穂川」と名付けて然るべきところですがなぜか「稲積川」の地名がついています。もしかすると「稲穂」と「稲積」を写し間違えたのではないかなどと想像してしまいます。

地名の由来は、この地に明治40年、稲積豊次郎が「軽川稲積農場」を開設したことによります。富山県高岡市に生まれた豊次郎(1861~1917)は商才に長けた人物で小樽を拠点に「練かす」の運送などを手掛けて成功しました。明治23年には、北海道有数の精米米穀商として共成株式会社を経営し本社屋を小樽市住吉町に建築しました。これが現在の「小樽オルゴール堂」で「小樽市指定歴史建造物」に指定されています。その他小樽市堺町で稲積倉庫を経営するなど小樽商人を代表する人物の一人でした。明治40年には6社の企業の役員名簿(取締役)に豊次郎の名前があり、実質的な経営者だったと思われます。

明治40年に琴似屯田兵村が管轄していた荒地450町歩を買い入れ「軽川稲積農場」を開設しました。農場周辺は劣悪な泥炭地だったため排水路や防風林などを整備し耕地としていきました。

明治41年、郷里高岡市から姪の稲積たつとその夫龍田安二郎(稲積姓に改称)をともに呼び寄せ農場の管理人とし、現在の富丘1条7丁目に農場管理事務所兼家屋を建てました。

大正3年には小作25戸を入植させ125町歩を耕作し、他は自作地として開放しています。新発寒5条1丁目には「発寒稲積 開拓記念碑」が建てられています。

周辺にはすでに明治27年に「前田農場」(1803町歩)、他に大正初期には乳牛のホルスタイン種を初めて導入した「極東農場」(後の明治農場)(1869町歩)など大規模な農場が開設され酪農や畑作が行われていました。「稲積農場」でも、酪農や畑作が行われ牛乳や牧草を積んだ馬車が行きかかっていました。農場内には「炭鉱排水」(現中の川)から揚水して操業する大きなでんぷん工場もありました。

「稲積地区」は昭和40年代中頃から宅地化の波が押し寄せ、次第に農地を手放し無計画に分譲転売されるようになりました。昭和48年には「札幌市ていね稲積土地画整理組合」が結成され、道

路や上下水道の整備を進め宅地の供給と公園用地や学校用地の確保なども含めた区画整理事業が展開され市街地化が進み現在に至っています。

ほかにも豊次郎は大正期に「訓子府町」や「置戸町」に相次いで農場を開設していて、行政地名にはありませんが置戸町勝山地区に「稻積」の通称地名が残り、置戸町勝山・安住地区で「常呂川」に合流する小河川に「稻積川」の名称がついています。

天狗橋と安春川 *天狗のおじさん堀内清四郎と屯田中隊長安東大尉*

「天狗橋」は新琴似第5横線が「新川」と交差するところに架かる橋で南側に発寒鉄工団地があります。「新川」は樺戸監獄の囚人たちによって掘られたとも言われ、明治19年に着工し20年に完成しました。川幅は現在よりも狭く、幅1mほどのところもあったといえます。

明治42年に新琴似側に琴似小学校付属発寒特別教授場（現新川小学校）が開校し、対岸の発寒からも通学するようになりました。しかし、当時の橋はヤチダモの丸太3、4本を川に渡し、その上に板の代わりに木の枝を隙間なく並べて、牧草の株を敷いて踏み固めた粗末な土橋でした。

そこで明治45年ころに子供たちが安全に通学できるよう新しい橋に架け替えられました。このときに工事を請け負った棟梁が宮城県岩切村（現仙台市宮城野区）出身の琴似屯田兵堀内清四郎でした。堀内は身長が6尺（約180cm）近くある大男で鼻が高く「天狗」のあだ名があり近くの子供たちにも「天狗のおじさん」と呼ばれていました。また、いつも「俺は手稲の金山を見つけるぞ」と言っただけで出かけるので「ホラ吹き天狗」のあだ名もあったということです。これが「天狗橋」の名前の由来です。現在の橋の柵には天狗の装飾があつて名前の由来を記した説明板があります。

「安春川」は新琴似5条1丁目付近から「発寒川」に流入するまでの延長4.8km（札幌市管理区間）の石狩川水系1級河川です。しかし、「安春川」は水源をもたない排水溝で泥炭地の広がる排水性の悪い新琴似一帯の開拓のために明治23年に掘削された大排水溝です。新琴似5条沿いに西北へ流れ、新琴似4条13丁目から北へと流れを変え屯田町と石狩市の境界となる「発寒川」へ「紅葉橋」の下で流入します。

明治20年に新琴似屯田が入植しましたが一帯は低湿な泥炭地で開墾は困難を極めました。そこで第3代新琴似屯田中隊長安東貞一郎大尉が大排水溝の掘削を計画し、明治23年に国費を投じて屯田兵らによって開削し完成させました。

地名の由来は「安東」の「安」と工事請負人の「春山某」の「春」をとって付けたとの説と、安東が「春」に着工したからだと伝えられています。

水源をもたない「安春川」は大正期には水枯れの状態だったといい、洪水時の排水機能も不十分で何度となく洪水による浸水被害を繰り返しました。昭和初期には「新琴似排水土工組合」を設立して排水溝工事を重ねてきました。

しかし昭和40年代に入ると都市化の進展で農地転用が続出し、土地改良事業の続行が困難となりました。「安春川」は雨水を排水するだけの排水溝となり河川の体をなさなくなっていました。

しかし、平成4年に国の「ふるさとの川モデル事業」に認定され、JR学園都市線近くの新琴似5条2丁目あたりで「創成川水再生プラザ」の高度処理水を導水して、再び地上を流れる河川に生まれ変わりました。

「先人の労苦をしのぶプロムナード」をテーマにせせらぎを回復させる事業が展開され、昭和63年

から平成4年にかけて、新琴似5条1丁目から10丁目あたりまでの河畔810mに桜を植樹し四季折々の風情を楽しむことのできる遊歩道が整備されました。

学田 何てたって子どもの教育

「学田」の地名は札幌市内に数か所残っていました。多くの苦難の中で故郷を離れ、札幌の開拓にあたった入植者は、まず子弟の教育を重視し寺子屋のような私塾を創設しています。当初は開拓使の資金援助もありましたが明治15年に開拓使制度が廃止され、学校経営は基本的に保護者の負担となりました。しかし、開墾農家の生活は苦しく何らかの公的支援による教育費の補助が必要でした。

「学田制度」は明治15年に北海道三県一局時代に入り、政府の許可を得て各県で「学田規則」を施行したのが始まりです。農業開発の振興と学校教育の維持のためにとられた施策で、その内容は「農業現術教育の実習用地及び学校維持費の財源として、公立小学校1校に50万坪(165ha)を無償下付する」というものでした。当時の公立学校は給料については官費負担でしたが施設維持費などは地元負担で、財政力の弱い道内の町村にとっても学校教育の維持には大きな負担を強いられその軽減を図ることが急務でした。

「大正5年版地形図」には東区丘珠町「サッポロさとらんど」界限、現北区太平7～8条1丁目あたり、清田区里塚・美しが丘界限の3か所に「學田」の地名が記載されています。

東区のは明治7年につくられた寺子屋を前身に10年公立学校として認定された「丘珠教育所」(現丘珠小学校)、2つ目は明治5年に開設された「篠路教育所」(現篠路小学校)、そして3つ目は明治19年に作られた現清田小学校の前身となった教育所の学田でした。現在も篠路には「学田通」の地名とそれに沿って「旧伏籠川」支流に「学田川」が篠路1条1丁目から百合が原9丁目まで1.5kmが残っています。

また新琴似から新川には昭和18年まで旧字名に「学田ノ一部」とか「学田の大部」がありました。新琴似の南東部の北27条通、麻生町、創成川、琴似栄町通、新川南東部(東牧場)などに囲まれた五角形の地域(現北34条西7丁目周辺)で明治20年に新琴似屯田創設と同時に私立新琴似小学校(現新琴似小学校)が開校し同時に学田が下付されものです。

学田は民間に貸し付けられて、隣接の牧場地区と同様に小規模の畜産農家が入地し、その賃料が学校維持費に充てられました。「新琴似学田」と同時に境界線一本を隔てた南隣りには創成小学校の学田があって、「新琴似学田」と区別して「札幌学田」と呼ばれていました。

もう1か所は明治8年に円山開拓の祖上田万平が主導して開設した簡易教育所(現円山小学校)の学田がありました。明治15年に「学田規則」が実施されると、上田は西野地区に30万坪(約100ha)の無償貸与を受け、「第一学田」、一般には「円山学田」と名付けた学田を拓きました。「円山学田」にはまず炭焼き人を入植させ、炭焼き窯1か所につき10円で炭を焼かせ3年目には200円ほどの収益が出たといえます。開墾後は小作人をいれてその小作料を学校経営に充て、最後は小作人に払い下げをしました。西野6条3丁目の「西野まちづくりセンター」に「圓山学田記念碑」が残っています。その後北海道神宮近くに「第二学田」、北3条から北5条周辺に「第三学田」を作りその収益は学校施設の保全や改良に使われ保護者の負担は軽減されました。

また「琴似発寒川」を挟んで「円山学田」南東側の西区福井、小別沢、中央区盤溪にかけて現琴似小学校の「琴似学田」もありました。その他に現南区南沢には明治11年に開校した山鼻小学校の

学田もあって「八号の沢左学田」と「八号の沢右学田」の地名が付いていました。

ここまでは明治 15 年施行の「学田規則」によって設置された「学田」ですが、それ以前に学田の地名をつけた場所がありました。

それは明治 5 年 2 月半ばに旧白石藩士三木勉をリーダーとする 47 戸 241 人が入植した上手稲で、すぐその年の 5 月に三木は自宅を開放して私塾「時習館塾」を創設しました。現在も西町南 19 丁目「中の川公園」に「時習館の婢」が残っています。

明治 11 年に開拓使官費 100 円と村民の寄付金 77 円で「公立上手稲教習所」とし、その後上手稲小学校を経て現在の手稲東小学校となりました。

18 世紀には旧仙台藩には藩校明倫館があり、19 世紀初めころ新田開発が盛んとなり「学田」が造られていました。なによりも子弟教育の大切さを思う三木は故郷の「学田」に倣って「手稲宮丘公園」のある小丘を「学田山」と命名し、周辺を取りまく開墾用農道にも「学田」の名をつけました。「学田 1 号通」（現山の手通）「学田 2 号通」（現宮の沢北 1 条通）「学田 3 号通」（現西野屯田通）と「学田 5 号通」（西野通）の 4 路線があつて、その他にも市道に「手稲学田通線」があります。

福移 「當別太」へ入植した「筑前開墾」

「福移」は札幌市の北東端、北区篠路町の石狩川左岸にあり、現在は豊平川が南側から、当別川が北側から合流する近くに位置します。南側は東区中沼町に北側は石狩川を境界に当別町と接しています。

明治 15 年、生活に困窮していた筑前（福岡県）の士族救済を目的に北海道移住が勧められ、農商務省から 60 戸分 12000 円の資金貸与を受けて福本誠をリーダーとする「北海道移住開墾社」が組織されました。5 月には予定よりは減ったものの士族 51 戸、175 名がこの地に入植し、記録文献には「筑前開墾」と記載されています。

しかし、入植当初幹部が貸与金のほとんどを海産物投機につき込み喪失してしまったため最初から開拓は困難を極めました。

その後も度重なる石狩川の氾濫によって苦しめられ、この地を離れる者も多くいました。明治後期には石狩川の治水対策で、蛇行部の直線化が行われ開墾した農地が流路となって水没したところもありました。

もともとのこの一帯はアイヌ語で「当別川・沼のような川・の川口」を意味する「ト・ペツ・プト」と呼ばれ、入植当初は「當別太」の漢字地名があてられていました。

「明治 29 年版地形図」にも當別太と記されています。「大正 5 年版地形図」には札幌大橋のあたりに「下當別太」、現篠路清掃工場界隈に「中當別太」さらに上流の石狩川左岸沿い「上當別太」の地名がありました。

石狩川右岸の當別村にもちょうど篠路村上當別太の対岸に下當別太、さらにその上流旧石狩川右岸に上當別太の地名が記されています。

正式には昭和 12 年の篠路村字名改正により篠路村當別太は篠路村福移となりました。おそらく當別村にも同名地名があり、それとの混同を避けるために「筑前開墾」の歴史の足跡を残すために「福移」の地名を充てたと考えられます。

「昭和 25 年版地形図」では、篠路村上當別に「福移」、中當別に「中福移」、下當別太に「下福移」の地名が記され、昭和 30 年に篠路村が札幌市に併合されて札幌市篠路町福移となりました。

広島 「西野米」の生産で有名だった「廣島開墾」

「広島」は西区西野にあった地名です。西野地区は明治 4 年に新潟出身の森三吉、平野平八郎、熊倉久蔵、池田松五郎、和栗甚太郎の 5 戸が「ベッカウス」、現在「二股」と呼ばれる西野 6 条 2 丁目周辺に入植したのが最初でした。

しかし、本格的な開拓は明治 18 年に広島県人前鼻村七、竹本芳平、山田伝兵衛、理寛寺栄蔵ら 6 戸 18 人が「琴似発寒川」左岸の現在西野 11 条界限、通称「西野第二地区」と呼ばれるあたりに入植してからで、「大正 5 年版地形図」には「廣島開墾」と記載されています。

ここは「琴似発寒川」が形成した扇状地で保水性が弱く、入植当時から農業用水の確保が課題でしたが、明治 33 年に「発寒川」（現「琴似発寒川」）や「中の川」（現「西野川」）から導水する「広島開墾用水」とか「西野用水」と呼ばれる農業用水路が完成したことで急速に周辺の水田化が進みました。

「大正 5 年版地形図」や「昭和 25 年版地形図」を見ると西野全域から上手稲（現西町や宮の沢周辺）まで水田が広がっています。明治末期には良質米として評判となった「西野米」を生産する札幌有数の米どころとなりました。粳すりには水車が利用され当時 100 台もの「粳すり水車」が稼働していました。

また現在「西野通」の地名が付いている西野 5 条 7 丁目から「中洲橋」（西野 12 条 8 丁目）までの延長 1.7 km の道路はこの地域の中心道路で通称「広島通り」と呼ばれていました。西野 8 条 8 丁目には「広島通」のバス停もあって、このほかにも「広島 1～3 号線」や「広島川添線」と名付けられた市道もありました。

昭和 20 年代後半から水田にかわって野菜農家が徐々に増加しましたが昭和 40 年代後半からは急激な宅地化が進み農地は姿を消していきました。

福井 米づくりにも成功した福井県出身の開拓者

「福井」は「左股川」左岸に位置し西区平和と中央区小別沢、盤溪に挟まれています。南西の平和との境界には標高 303.2m の「五天山ごてんざん」があります。

明治 19 年に最初に入植した福井県人の伊藤太治兵衛、鈴木善兵衛らの出身地から名づけられました。昭和 17 年までは手稲村大字上手稲村字左股の一部でしたが、字名改正で「福井」が行政地名として採用されました。昭和 42 年手稲町が札幌市と合併したときに「手稲福井」となり、昭和 56 年に「福井」となりました。平成元年に手稲区が西区から分区したため、現在の地域住民には手稲への帰属意識はほとんどありません。

明治 20 年代以降、この地区の開拓の先駆となる人々が次々と入植しましたが、米の自給を願い造田しようとしても農業用水の確保が難しく、しばらくは炭焼きや木材の運搬などで生活を支えるほかありませんでした。明治 33 年、上流の「源八の沢」から水を引いて造田されるようになりましたが水量が少なく苦労が続きます。後に「左股川」本流から導水する用水路が完成したことで、大正

期には下流の西野とともに「西野左股米」の産地として知られるようになりました。戦後は蔬菜生産が盛んになりましたが、1970年代から宅地化が急激に進みました。

「五天山」は昭和10年に井上弥一郎が夢に^{おおくにぬしのおおかみ}大国主大神からお告げを受け、山の所有者らと共同で山頂に神祠を設け、仏典から引用して「五天山」と命名しました。南西山麓は安山岩の採石場となりましたが現在は跡地が「五天山公園」となりパークゴルフ場などがあります。

山口 山口県人が拓いた2つの山口 手稲と拓北

「山口」の地名は市内に2か所あり1つは手稲区に行政地名として「手稲山口」があり、もう一つは北区拓北地区に行政地名にはありませんが、「山口」の地名がありました。

「手稲山口」は昭和42年手稲町との合併により誕生しました。手稲区の最北端に位置し、海岸線と平行に海岸砂丘の後背を流れる「^{すみかわ}清川」が小樽市銭函との境界となっています。

明治14年山口県^{くが}玖珂郡今津村の旧岩国藩士族、宮崎源治右衛門を中心に志をともにした同郷の男子51名女子27名、14戸が入植しました。翌年下手稲村から分離独立して「山口村」が誕生し、手稲村になってからも字地名として「山口」「星置山口」が使われました。

明治17年から明治27年まで4次にわたって山口からの移住が続き戸数は84戸に達しています。しかし、数列の海岸砂丘と後背湿地が混在する土地の開墾は困難を極め、農業に経験のない、しかも温暖な地方からの移住で厳しい冬の寒さはとりわけ大変でした。

特に明治15～16年ころにトノサマバッタの大襲来があり開墾の緒に就いたばかりの農作物に甚大な被害が生じました。駆除した成虫を埋めた場所には「手稲山口バッタ塚」の記念碑が建てられています。宮崎源治右衛門は私財1500円を投じて移住者を支援しましたが大部分の人は資力に乏しく生活は困窮しました。多くは出稼ぎを余儀なくされ志半ばで挫折する人もいました。

大正から昭和初期のころから砂丘の砂地でスイカ栽培が行われるようになり「山口スイカ」の商標レッテルも作られ、現在も「サッポロスイカ」の名前で高い人気があります。また「大浜みやこ」の商標でかぼちゃの生産が行われ本州へも特産品として販売されています。

もう一か所は篠路町拓北からあいの里にかけての地区にあります。旧篠路村の字地名に「山口」があり、「大正5版地形図」にも記載されています。昭和55年に住宅・都市整備公団や北海道住宅供給公社などによる「拓北ニュータウン計画」で「あいの里団地」の造成が始まるまであいの里4条2丁目に「山口中央」のバス停もありました。

ここは明治初期の農場主「山田顕義」の名をとって「山田農場」とか「山田開墾」と呼ばれていました。「山口」の地名は明治25年に開墾に従事していた山口県人らがこの農場を引き継いだときに「山口開墾」と改称しています。

旧長州藩士の山田顕義は41歳で司法大臣に任命された明治政府の要人でした。明治13年に篠路拓北山口地区に140町歩の土地の払い下げを受け、同郷出身の開拓者3戸が移住し、明治15年にさらに山口県人5戸が移住して開墾事業にあたりました。

山田は明治15年に開墾地のほとんどを当時南1条西2丁目で荒物雑貨商を営んでいた佐藤金治に8000円で売却し、その後「佐藤農場」として小作人を募り開拓を進めていきました。大正期には20戸の入植者が大豆、小豆、亜麻、ナタネ、エンバクなどの畑作を専業にしていました。「札幌支庁管内案内図」(大正4年)にも「佐藤農場」と記載されています。佐藤は大正13年に農地を低額で小作人に解放し佐藤農場に終止符を打っています。

令和元年に開校 120 年を迎えたあいの里 3 条 6 丁目にある「鴻城小学校」の校名も山口に深く関わっています。山口市上宇野町の「鴻ノ峰」（標高 338m）には大内義長の山城だった「高嶺城址」があります。幕末に高杉晋作の奇兵隊などとともに長州正義派の一軍として井上多聞が率いたのは「鴻城軍」と名乗っていて、明治には海軍兵学校の予備校として旧制中学の「鴻城義塾」がありました。小学校の校名はそこから命名されたものです。

紅葉山砂丘 札幌に海はないはずなのに

「紅葉山砂丘」は石狩湾の海岸線から約 5～6km の内陸を海岸線とほぼ平行に南西から北東方向へ走る内陸砂丘です。

手稲区前田から発寒川北岸に沿って石狩市花川を抜け、一旦「茨戸川」で途切れますが東岸の生振南部を通過して石狩川右岸の石狩市美登位まで続きます。総延長は約 20km、幅は約 0.5～1km、比高約 5～18m、最高点は石狩市花川北 2 条 6 丁目の東にある「紅葉山」で 18.5m あります。

今から約 6500～6000 年前の縄文時代は縄文海進期と呼ばれ、現在より気温が 1～2° C ほど高く海面は 3～5m 上昇し石狩湾は内陸まで侵入していました。そのころ沿岸流の影響で「紅葉山砂丘」の元となる砂州が形成され、その南側にある新琴似町や屯田町あたりは、淡水と塩水の混じった汽水湖のラグーン（潟湖）「古石狩湖」になっていました。

その後海岸線は 1000 年に 1km ほどのスピードで後退を続け、その過程で幅 50～100m、比高 1～2m ほどの砂堤列と低地（後背湿地）が交互に 20 列ほど海岸まで続いています。

かつては砂堤上は畑、低地（後背湿地）には水田が分布するなど土地利用の違いからある程度判読できましたが現在は完全に整地され住宅地となったため判読できません。ただし大きな地震が発生すると低地（後背湿地）は揺れが大きく、揺れの小さい砂堤上とで被害の違いが出ると考えられます。

「紅葉山砂丘」では 5500 年ほど前から縄文人が生活を続け、縄文、続縄文、擦文、そしてアイヌの時代に至るまでの生活用具や漁労施設などが「紅葉山」の南西部の同じ遺跡から発見されています。

このあたりは「江差沖の口御役所西蝦夷地石狩場所絵図」（幕末頃）や「松浦図」には「シリサマ」と地名が記されているところで、「発寒川」の昔の川筋と「追分川」とが合流するところに沼があってその左岸に現在の「紅葉山」があります。

語源は「永田地名解」に「シリ サム」（山傍）とあり土地の状況と一致しています。「紅葉山」の南西斜面下の丁度この場所に「屯田（紅葉山）墓地」があり、屯田町から墓地へ発寒川に架かる「紅葉橋」があります。昔は「涙橋」の名前が付いていて墓地に行く人々が涙して渡った橋なので命名されたといわれます。

「明治 29 年版地形図」には現石狩市と北区新琴似町の境界あたりの石狩南高校付近に「モリ」という地名が記されています。カタカナ表記なのでアイヌ語地名であることは間違いなさそうです。知る限りこの地名について解説されたものはなく想像の域を出ませんがモ mo（小さな）リ ri（高くナル）あるいはリク rik（高い所）で砂丘上の小丘と考えられます。

あるいは湧別川南支流「武利川」、音別川支流にも「ムリ川」があり音が似ています。「アイヌ語

地名解」更科源蔵（1982）には「海岸に生えるてんきぐさ（はまにんにく）のこと」とあります。「永田地名解」にはムリイ muri - i（ムリ草ある處）とあり山田秀三「北海道の地名」（昭和 59 年）にも「ムリ草」海浜に生える通称「おでん草」と説明されています。石狩浜ではごく普通に見られる海浜植物で、これも無理にこじつければ砂丘上の植生として考えられなくもありません。その他、「大正 5 年版地形図」には「砂山」の地名が手稲前田北端から石狩市花川 10 条 4 丁目あたりにありました。

引用および参考文献（2022 年掲載の新札幌地名考（1）も含む。）

- ・北海道蝦夷語地名解 永田方正 北海道道廳（1891）
- ・札幌繁盛記 木村昇太郎編 前野玉振堂・石塚書房（1891）
- ・札幌沿革史 全 札幌史學會 秀英舎（1897）
- ・札幌案内 狩野信平編 廣目堂（1899）
- ・最近之札幌 佐々木鐵之助編 札幌實業新報社（1909）
- ・大札幌案内 大塚高俊 近世社（1931）
- ・札幌狸小路発達史 札幌狸小路発達史編纂委員会編 札幌狸小路商店街商業協同組合（1955）
- ・札幌のアイヌ地名を尋ねて 山田秀三 楡書房（1965）
- ・郷土史はっさむ 発寒の歴史 発寒小学校郷土史編纂委員会（1969）
- ・物語薄野百年史 脇 哲 すすきのタイムス社（1970）
- ・琴似屯田百年史 琴似屯田百年史編纂委員会（1974）
- ・札幌地名考 さっぽろ文庫 1 札幌教育委員会編 北海道新聞社（1977）
- ・札幌の自然を歩く 地学団体研究会札幌支部編 北大図書刊行会（1977）
- ・日本の古地図 札幌 堀淳一 編 講談社（1977）
- ・郷土史真駒内 郷土史真駒内編集委員会編（1977）
- ・亜麻の名残は町名に 麻生町 広報さっぽろ北区版 札幌市北区（1977）
- ・豊平川 さっぽろ文庫 4 札幌教育委員会編 北海道新聞社（1978）
- ・白石歴史ものがたり 札幌市白石区老人クラブ連合会編集委員会編（1978）
- ・さっぽろの昔話 明治編 上 河野常吉編 みやま書房（1978）
- ・北海道 道路 53 話 北海道新聞社編 北海道新聞社（1979）
- ・語源はアイヌ語？－「道で切られた川」篠路烈々布 広報さっぽろ北区版 札幌市北区（1979）
- ・拓北百年史 1880～1980 篠路拓北土地改良区（1980）
- ・札幌歴史地図＜大正編＞ さっぽろ文庫別冊 札幌市教育委員会編（1980）
- ・北緯 43 度 札幌というまち・・・ 札幌地理サークル編 清水書院（1980）
- ・藻岩・円山 さっぽろ文庫 12 札幌市教育委員会編 北海道新聞社（1980）
- ・新川郷土史 新川郷土史編纂委員会編（1980）
- ・手稲開基 110 年誌 手稲の今昔 手稲連合町内会連絡協議会・手稲鉄北連合町内会連絡協議会（1981）
- ・平岸百拾年 「平岸百拾年」編集委員会（1981）

- ・札幌古地名考 札幌原人(小川高人) 社団法人北海道建築士会札幌支部 札幌支部だより「街」
「げんちゃんスロープ」(1981)「さむらい部落」(1983)「なまこ山」の巻(1984)「大根道路」
(1985)「弾丸道路」(1986)「陸軍歩兵第25聯隊」(1992)「行啓通」(1994)
- ・南区のあゆみ 札幌市南区総務部総務課 札幌市南区役所 (1982)
- ・北海道地名大辞典上・下 角川日本地名大辞典編纂委員会編纂 角川書店 (1983)
- ・郷土史 みすまい 簾舞開基110年記念事業実行委員会 (1984)
- ・建物業種から見た薄野地区の地域分化 沼田 武 札幌地理サークル 会誌第18号 (1985)
- ・新琴似百年史 新琴似百年史編纂委員会編 (1986)
- ・北大歴史散歩 岩沢健蔵 北海道大学図書刊行会 (1986)
- ・殿様の余剰武士対策 前田農場 広報さっぽろ北区版 札幌市北区 (1986)
- ・川の風景 さっぽろ文庫44 札幌市教育委員会編 北海道新聞社 (1988)
- ・札幌の自然 地学編 岡部三郎 富士書院 (1988)
- ・豊平館・清華亭 さっぽろ文庫15 札幌教育委員会編 北海道新聞社 (1988)
- ・さっぽろ歴史散歩 中島公園百年 山崎長吉 北海タイムス社 (1988)
- ・札幌の山々 さっぽろ文庫48 札幌教育委員会編 北海道新聞社 (1989)
- ・完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程 大丸裕武 地理学評論 (1989)
- ・札幌の通り さっぽろ文庫58 札幌教育委員会編 北海道新聞社 (1991)
- ・定山溪温泉 さっぽろ文庫59 札幌市教育委員会編 北海道新聞社 (1991)
- ・「咸臨丸」最後の乗船客 白石片倉小十郎家臣団 塚本謙蔵 (1993)
- ・郷土の先人・先覚313 須藤良弘 荘内日報社 (1994)
- ・小樽商人の軌跡 第9章 啄木と多喜二 その3 小樽商工会議所 (1995)
- ・地形と地質 さっぽろ文庫77 札幌教育委員会編 北海道新聞社 (1996)
- ・最初は丸木橋だった豊平橋 札幌市中央区役所 HP
- ・「札幌本道」今昔 一川の道「千歳越」は、歳月を経て「弾丸道路」へ 三浦 宏 北の交差点 Vol.6. AUTUMN-WINTAR (1999)
- ・サッポロバレー・コア・ネットワーク 札幌市内 IT 産業で集積効果を得つつある企業群の現状と課題 桑原隆輔 日本製作投資銀行札幌支店 (2000)
- ・あこがれの洋風生活 桑園博士町 歴史の散歩道 札幌市中央区 HP (2000)
- ・歴史の散歩道 二条市場 札幌市中央区役所 HP (2000)
- ・豊羽鉱床とプレート・テクトニクス 地質ニュース564号 渡辺 寧 (2001)
- ・南区開拓夜話 嫁泣せの峠だった 札幌市南区役所 HP (2002)
- ・行啓通商店街 さっぽろわくわく商店街 札幌市商店街振興組合連合会 (2003)
- ・石狩紅葉山49号遺跡 石狩ファイル 石橋孝夫 (2004)
- ・「菊亭侯爵入植地跡」 塚本謙蔵 「白石村一番」中濱康光「吉田善太郎住居跡」塩見一釜 「日本近代酪農発祥の地-宇都宮牧場跡」「札幌遊郭(通称白石遊郭)跡」富岡秀義 白石区紹介 白石歴しるべ 札幌市白石区役所 HP (2005)
- ・北海道開拓の基礎を築いた指導者たち 今年2006年はエドウィン・ダン来札130周年-真駒内を拓いたダンの牧牛場とモーテン・ラーセンの有畜農業- 中垣正史

北海道マサチューセッツ協会 (2006)

- ・北海道開拓の基礎を築いた指導者たち 札幌村の開祖大友亀太郎と日本畜産の指導者エドウィン・ダン 中垣正史 北海道マサチューセッツ協会 (2006)
- ・戦後北海道開発史 開発体制の成立過程と開発事業の地域展開 平工剛郎 (2007)
- ・謎の崖を追えー 豊平川左岸・河岸段丘 — 川本思心 さっぽろサイエンス観光マップ (2006)・札幌の歴史を築いた先人達 小川二郎・小田良治 志村鉄一・吉田茂八 札幌歴史資料館 (2007)
- ・札幌の歴史を築いた先人達 小川二郎・小田良治 志村鉄一・吉田茂八 札幌歴史資料館 (2007)
- ・紅葉山砂丘 石狩ファイル 志賀健司 (2007)
- ・札幌の歴史を築いた先人達 大友亀太郎 札幌歴史資料館 (2007)
- ・札幌と札幌みそラーメン 北海道ファンマガジン (2008)
- ・あつべつ今昔ものがたり 阿部敏夫 札幌市厚別区役所 HP (2008)
- ・豊羽鉦山 残念ながららついに閉山 札幌周辺の山や石の産地を巡る旅 HP (2008)
- ・野幌丘陵 「地質と土木をつなぐ」の貯蔵庫 石井正之 (2008)
- ・産学官の道しるべ「転機を迎えたサッポロバレー」登坂和洋 科学技術振興機構 (2009)
- ・歴史的建造物「サムライ部落」 michiru ブログ (2009)
- ・モエレ沼遊水地 石狩川治水 100 年 札幌開発建設部 (2010)
- ・石狩川治水に係わる主な事業治水 100 年 鴨々川水門 札幌開発建設部 (2010)
- ・定山溪温泉の開祖 - 知られざる美泉定山 (1805~1877) の生涯 北海道を知る歴史発見の旅 シリーズ定山溪シリーズ「資料集」 北海道マサチューセッツ協会 (2010)
- ・札幌都心商業地区 札幌駅地区の商業集積と大通地区商店街の変容 金森正郎 札幌地理サークル会誌第 43 号 (2010)
- ・庚申塚 碑を訪ねて 札幌市南区役所 HP (2011)
- ・篠路の野に脈打つ山岳信仰 仙人庚申塚 歴史と文化 札幌市北区役所 HP (2011)
- ・鴨々川の名の由来 (私説) (2011) 西野用水と学田 (2017) 札幌うおーく点描
- ・ラーセン農場跡 種畜場のむかしを訪ねて 札幌市南区役所 HP (2011)
- ・歴史を刻む採掘の碑 南区開拓夜話 札幌市南区役所 (2011)
- ・札幌再発見 三角点通の由来の三角点が引っ越し? 札幌市東区役所 HP (2011)
- ・荒地を開き藍を栽培ー篠路興産社 札幌市北区役所 HP (2011)
- ・篠路に石狩初の農村づくり 荒井金助 札幌市北区役所 HP (2011)
- ・「札幌温泉」元祖リゾート開発の夢の跡 (札幌・界川) ブラサトル (2011)
- ・篠路に石狩初の農村づくり みてきて北区 札幌市北区役所 HP (2011)
- ・札幌まぼろし温泉物語 藤本和徳 北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部 地質研究所 (2011)
- ・夢と思い出を運ぶ石狩街道 みてきて北区 札幌市北区役所 HP (2011)
- ・高射砲台座 (美香保公園) 札幌市バーチャル資料館 HP (2012)
- ・地図の中の札幌 堀 淳一 亜璃西社 (2012)
- ・札幌歴史散歩 片岡秀郎 ヒルハーフ総合研究所 (2012)

- ・明治初期商家銅版画資料に関する歴史情報学的研究 研究代表 菅原洋一 (2013)
- ・札幌の文化遺産(さっぽろふるさと文化百選)「本願寺街道」「志村鉄一・吉田茂八縁の地」札幌歴史資料館 (2013)
- ・札幌興農園(興農園耕地)飛行場跡地 空港探索・3:SS ブログ (2013)
- ・暁野墓地 五稜星の会 (2013)
- ・ていねっていいね 宿場町という時代もありました 札幌市手稲区役所 HP (2013)
- ・ていねっていいね 前田の基礎をつくった大農場 札幌市手稲区役所 HP (2013)
- ・北海道石狩平野の沖積層層序と特徴的な2層準の対比 嵯峨山積 他 北海道地質研究所報告 第85号 (2013)
- ・豊羽鉱山 村影弥太郎の集落紀行 HP (2014)
- ・札幌の今昔記 五番館103年の軌跡 札幌歴史資料館 (2014)
- ・札幌の今昔記 豊平橋の変遷 札幌歴史資料館 (2014)
- ・江別の屯田兵 江別市 (2014)
- ・ナマコ山・札幌の北炭③(2014)「ワンダーランド頓宮」(2014)「菊亭農場～北炭分譲住宅地」(2015) 烈々布の語源②(2016) レッレップ古川の痕跡(2016)「稲積をめぐる既出情報の考察」(2017) 札幌時空逍遥ブログ
- ・稲積農場よもやま話 澤口由美子 郷土史ていね 手稲郷土史研究会報第84号(2014)
- ・「サムライ部落」再び ホラー好きのフライマン ブログ (2014)
- ・札幌烈々布「大学村」周辺の歴史とその変貌 山内正明 札幌地理サークル会誌 第48号 (2015)
- ・北海道開拓の先覚者達(56) 荒井金助(1)(2) 三木勉 上田万平 財界さっぽろ 社長ブログ (2015)
- ・荒井金助と早山清太郎 シノロ140年の歴史 後編 池本吉一 札幌医通信 (2015)
- ・平岡の生い立ち 平岡地区町内会連合会 HP (2016)
- ・北海道開拓の先覚者達 美泉定山 財界さっぽろ 社長ブログ (2016)
- ・澄川図書館だより 2016年9月号 澄川図書館 (2016)
- ・札幌市の建物 その3 札幌建築観賞会版 札幌建築観賞会 (2016)
- ・マンオブザ北海道 河西由造 北海道歴史探訪 FMアップル (2016)
- ・なぜ電柱に昔の地名が残されるのか?“麻畑村”の痕跡を探る 道新りんご新聞 北海道新聞永田販売所 (2016)
- ・西区の紹介 地区別の歴史 「西野」「発寒」宮の沢 札幌市西区役所 HP (2017)
- ・「特集札幌の下町「創成東」を歩く・サムライ部落と遠友夜学校」谷口雅春 北海マガジン KAI (2017)
- ・厚別区の現況・歴史 札幌市厚別区役所 HP (2018)
- ・札幌テクノパーク紹介 札幌市エレクトロニクスセンター (2018)
- ・札幌の地名がわかる本 関 秀志編 亜璃西社 (2018)
- ・対雁街道 「歴史・文化」 江別創造舎 (2018)
- ・厚別山本公園 札幌市 HP (2018)
- ・円山山麓探訪記 宮ヶ丘・宮の森・円山西町 札幌歴史資料館 (2018)

- ・庚申とは 庚申塚や庚申様などの信仰・庚申の日 神仏ネット (2019)
- ・カトリック中央協議会札幌教区 HP (2019)
- ・公園概要 旭山記念公園 札幌市公園緑化協会 (2019)
- ・琴似川とコトニ川 さっぽこのウェブログ (2019)
- ・札幌市立稲積中学校 HP 学校のデータ (2019)
- ・札幌市立平岸中学校 HP (2019)
- ・札幌市立平岸小学校 HP (2019)
- ・札幌スキーのむかし 「西 18 丁目のむかし」 ウェブログ kojani (2019)
- ・シリーズ澄川④ 澄川西側の大開拓「茨木農場」の顛末 シリーズ「澄川」⑥ 澄川の東側を切り開いた阿部与之助氏の「阿部造林山」 細井全 BEHEMOTH ブログ (2019)
- ・新千歳市史 第 14 章 米軍・自衛隊 千歳市 (2019)
- ・手稲鉦山の変遷 林俊一 郷土史ていね 手稲郷土史研究会報第 84 号 (2019)
- ・ていねっていいね 手稲鉦山～鉦山の泣き笑い 札幌市手稲区役所 HP (2019)
- ・中島公園の歴史 札幌市公園緑化協会 (2019)
- ・明治の開拓期、有明は篠路屯田兵村の公有地だった 清田地区町内会連合会 HP (2019)
- ・フランシスコ会日本殉教者管区 札幌修道院 HP (2019)
- ・北海道 IT 推進協会 HP (2019)
- ・(株) 日の丸産業社 HP (2019)
- ・発寒神社の由緒 発寒神社 HP (2019)
- ・札幌市区画整理事業施行地区一覧表・光星地区 札幌市役所 HP (2020)
- ・西の里エリアの歴史 北広島遺産ハンドブック 北広島教育委員会編 (2020)
- ・円山学田 郷土の歴史 西野神社 HP (2020)
- ・鉦山に関わった人物 小坂まちづくり株式会社 HP (2020)
- ・札幌&大通公園 観光スポット&名所情報ガイド SAPO☆CAN (サポカン) (2020)
- ・札幌二条市場 さっぽろ二条市場商店街 HP (2020)
- ・札幌市中央卸売市場 沿革 1 札幌市中央卸売市場 HP (2020)
- ・札幌の産業団地 札幌産業ポータル さっぽろ産業振興財団 (2020)
- ・札幌百合が原公園 HP 百合が原公園管理事務所 (2020)
- ・桑園の歴史と由来 桑園連合町内会 HP (2020)
- ・ようこそ SAPPORO 自然とふれあう 札幌市公式 HP (2020)
- ・ようこそ小金湯さくらの森 定山溪沿線町内会連絡協議会さくらの森部会 HP (2020)
- ・JR 貨物「駅ナカ」物流の勝算、札幌に大型複合倉庫 日本経済新聞記事 (2020)
- ・道立自然公園野幌森林公園 北海道公式 HP (2020)
- ・商店街の歴史 ハツキタ商店街 HP (2020)
- ・元祖さっぽろラーメン横丁 HP (2020)
- ・きよたの歴史 明治から 21 世紀へ 札幌市清田区役所 HP (2020)
- ・平岡公園 HP 平岡公園管理事務所 (2020)
- ・「新謎解き さっぽろ」 古沢仁 北海道新聞 連載記事 (2022)
- ・明治期における役員会の規模と役員 - 明治期役員分析の基礎作業 (1) 和田一夫 早川洋

一 鈴木恒夫 発行年不詳

- 札幌都心部の地下空間の形成 再開発で更に広がるか 札幌クリップ BLOG (2020)
- フリー百科事典「ウィキペディア」 「あいの里」「曙 (札幌市中央区)」「旭山公園」「荒井金助」「荒井山」「一条大橋」「インジウム」「大倉喜七郎」「大倉山ジャンプ競技場」「大友亀太郎」「菊亭脩季」「小金湯温泉」「国道 12 号」「五番館」「サクシュ琴似川」「札幌駅」「札幌貨物ターミナル駅」「札幌軌道」「札幌ラーメン」「三角点」「三角点通」「精進川」「白旗山」「白石本通墓地」「澄川」「桑園」「創成川」「創成川公園」「早山清太郎」「月寒」「東北通」「道立自然公園野幌森林公園」「豊平川」「豊平橋」「西野 (札幌市)」「西宮の沢」「二条市場」「ひのまる公園」「福移」「北海道熱供給公社」「幌平橋」「本願寺道路」「松本十郎」「美泉定山」「美香保公園」「藻岩山」「モエレ沼」「モエレ沼公園」「紅葉山」「山本九右衛門」「山本厚三」「流通センター」「割栗石」 (2020)

札幌地理サークル 2022年度 決算報告

収 入		支 出	
21年度繰越金	8917	会誌印刷費	0
会 費	4000	郵 送 費	0
		文具・消耗品	0
		Web管理費	5000
収 入 合 計	12917	支 出 合 計	5000
繰越金	7917		

札幌地理サークル 2023年度 予算案

収 入		支 出	
22年度繰越金	7917	会誌印刷費	0
会 費	4000	郵 送 費	0
		文具・消耗品	0
		Web管理費	5000
		予 備 費	6917
収 入 合 計	11917	支 出 合 計	11917

会 誌 第 56 号

令和5年5月

札幌地理サークル

会 長 金森 正郎(札幌啓成) kmasao@plum.ocn.ne.jp

会誌担当 大久保雅弘(藤女子・非) moasa@ab.auone-net.jp

ウェブサイト: <http://chiricircle.michikusa.jp>